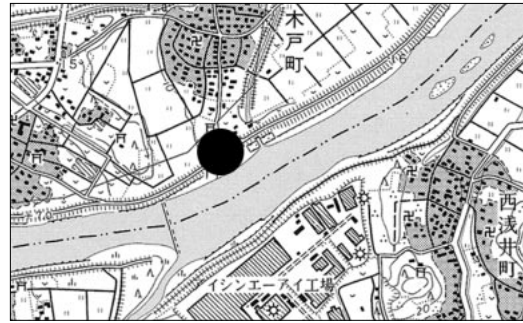


き どじょう
木戸城跡

所在地 安城市木戸町東屋敷
調査理由 矢作川改修
調査期間 平成12年10月～12月
調査面積 1,400㎡
担当者 川井啓介・池本正明・鈴木裕



調査地点 (1/2.5万「西尾」)

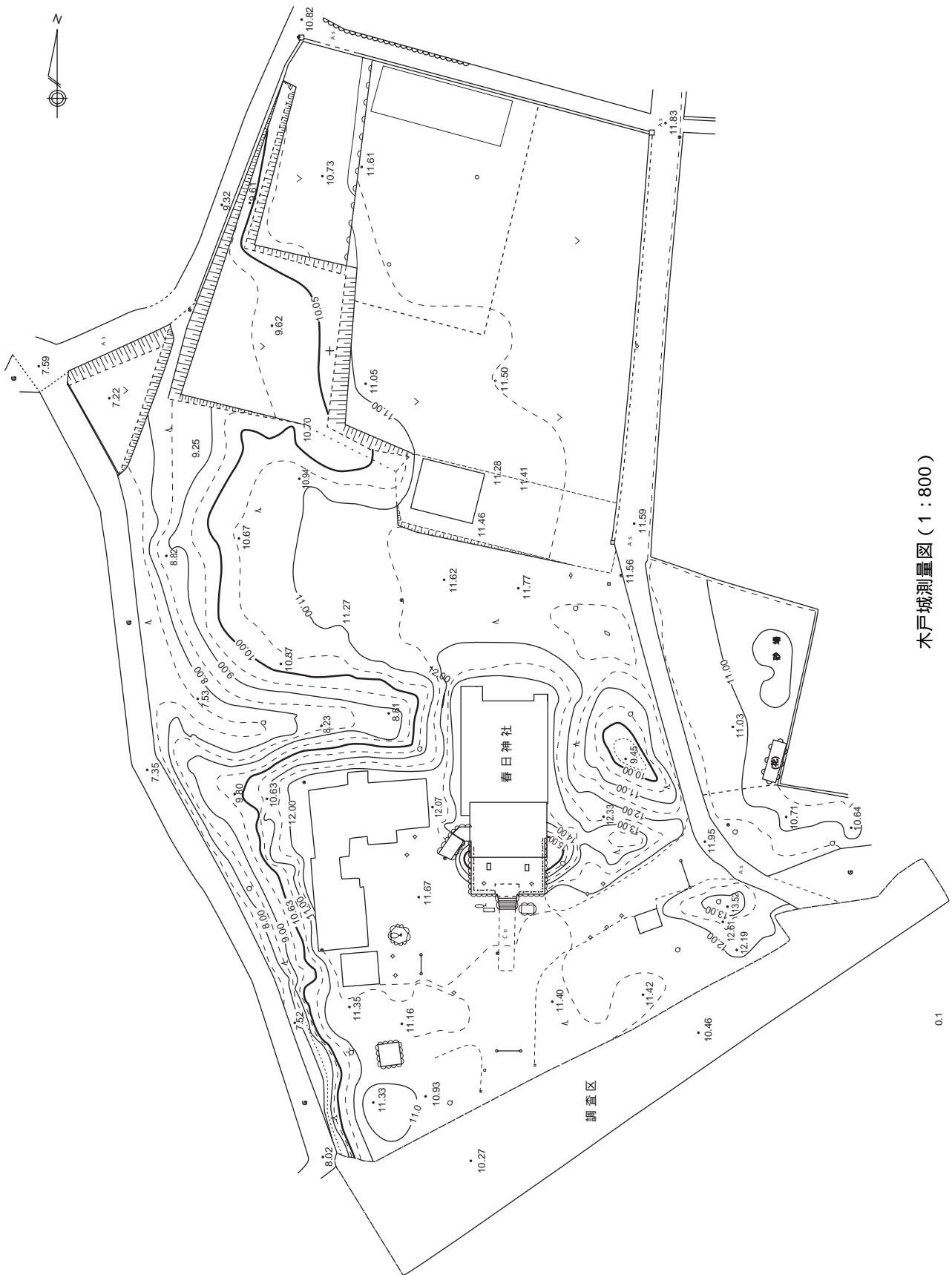
調査の経過 木戸城跡は、安城市木戸町東屋敷に所在する。地形的には、北側から南方に向かって緩やかに下る舌状台地上に立地している。調査区はこの先端部に位置し、標高は約12m。調査区の長辺がその幅と一致している。城跡は現在安城市指定史跡となっており、北側と東側に幅約10m、深さ約3mの堀が現存している。

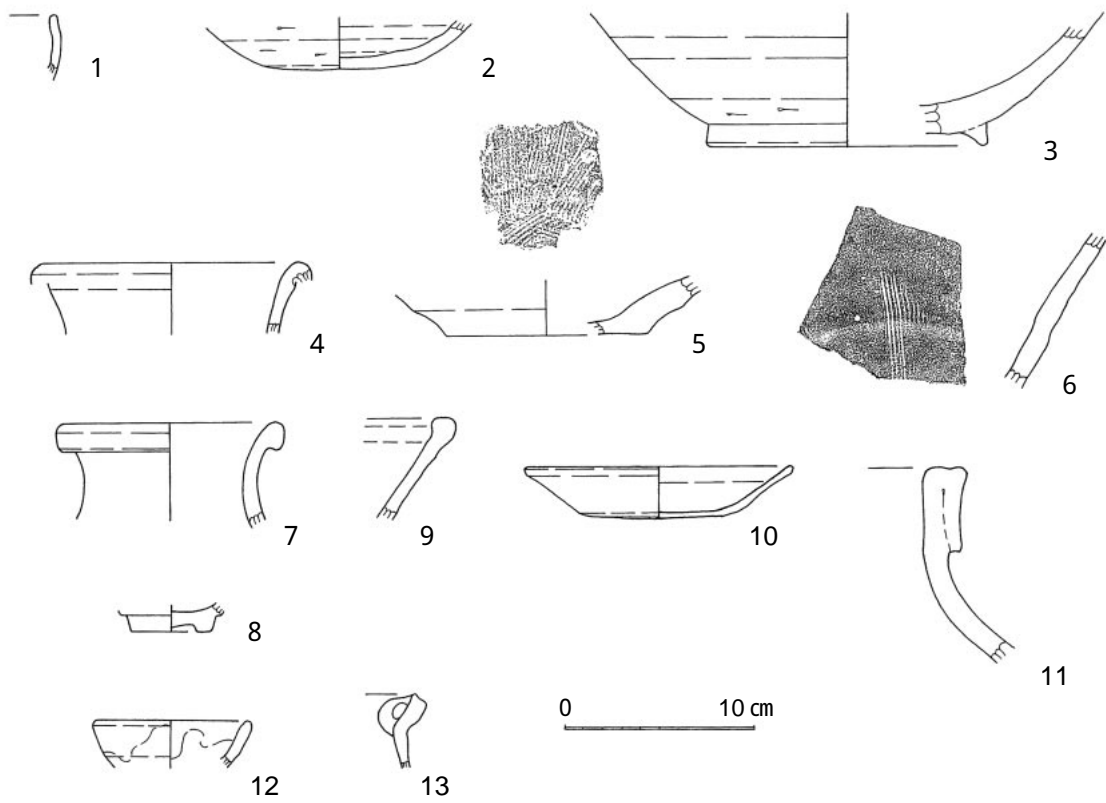
発掘調査は、矢作川改修に伴う事前調査として国土交通省から愛知県教育委員会を通して委託され、平成12年10月～12月に実施した。面積は1,400㎡である。

調査の成果 今回の調査で確認できた遺構は、大きく二時期に区分できる。前者は飛鳥時代～奈良時代を中心とする時期で、後者は戦国時代に該当する。いずれの遺構群も基盤層である赤褐色または黄橙色の土層上面で検出した。

飛鳥時代～奈良時代の遺構群は、竪穴住居、掘立柱建物、土坑などで構成される集落遺跡となる。竪穴住居は2棟確認している。このうちS B 01は、平面形が長辺5.2m短辺3.8mの隅丸長方形を呈する。他遺跡で確認されている同時期のそれと比較すると規模も大きい。戦国時代の遺構群は、土塁、溝、土坑などがある。これらは、遺跡の名称にもなっている「木戸城」に関連するものと考えられる。土塁は、2条検出されている。上記のように、調査区が南北に伸びる舌状台地のほぼ上面を占める関係上、調査区の東西が台地の縁辺部に該当している。土塁は、その場所に位置している。検出できた土塁(土塁A)は、断面観察によれば改修が確認できる。規模は、古段階が基底部幅3m、残存高0.8m、改修後が基底部幅9m、残存高3mになる。なお、東側土塁の外側には、溝が掘削されている。幅は4mを測る。西側土塁(土塁B)は、基底部幅6m、残存高1mを測る。残存状況は良好とは言えず、基底部のみが残存する。土塁に囲まれた範囲には、西側で掘立柱建物が検出されている。調査区の形状等により、全形は確認できないが、柱穴は検出面からの深さが0.9mを測る。また、西側土塁に近接した位置には、廃棄土坑(S K 167)が存在する。平面は楕円形で、長径1.8m、短径1.3m、検出面からの深さは0.5mとなる。埋土中より、施釉陶器、灰釉系陶器などの土器類、土壁と考えられる焼土塊、炭化米などが出土している。

出土遺物は、乏しい。しかし、飛鳥時代～奈良時代に属する資料として、須恵器、土師器が、戦国時代に属する資料として、施釉陶器、灰釉系陶器、土師器などがある。この他に中世前期に属する灰釉系陶器や、近世陶磁器も確認されている。(池本正明)





第1図 遺物実測図



航空写真



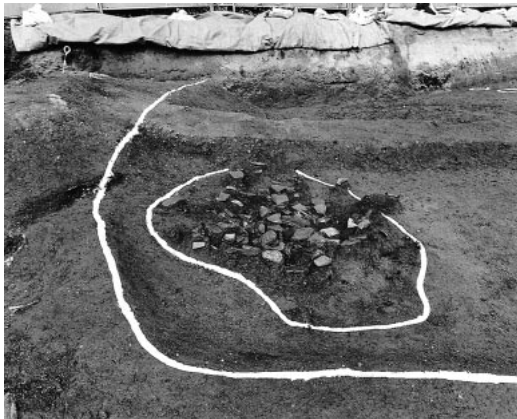
土壘 A 断面



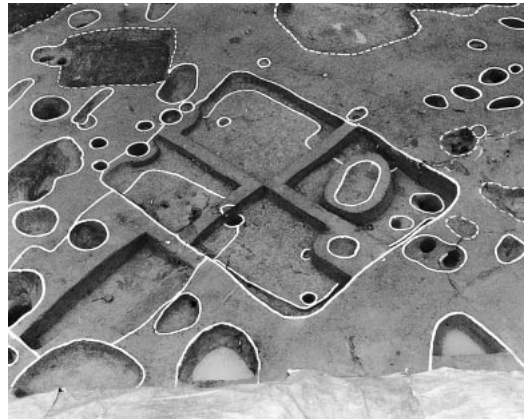
土壘 A 遠景



土壘 B ・ S D 04



S K 167



S B 02